

「勝坂系」土器に関する再検討

山 口 逸 弘

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 勝坂系とは

2-1. 共伴資料の確認 1

2-2. 共伴資料の確認 2

3. 伝統的な土器群の在り方

まとめ

—要 旨—

本稿は、群馬県内における、縄文時代中期中葉における、勝坂3式終末とされてきた土器群を共伴資料から検討を加え、「勝坂系」として加曾利E I式古段階に位置付ける試みである。群馬県内の西北部・東部各地の該期組成を概観し、各地域の組成差を考え、その上で「勝坂系」に見る画期・過渡期の土器群の次代への継続性の背景を探り、伝統的土器群の土器組成中の在り方を考えてみた。同時に、勝坂3式の主要分布圏として埼玉県の資料を加え、勝坂式という一型式の主体地域における継続性を観測し、群馬県の該期土器組成の差を考えた。群馬県における「勝坂系」は、区画文構成という単純な文様構成を保つが故に伝統と収斂進化の両側面を受容しながら、継続し続けたのである。

キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 群馬県

研究対象 縄紋時代中期土器群

はじめに

本稿では、縄文時代中期中葉末において、各土器群が異彩を放ち共存する「中期土器群共存社会」を踏まえ、中期後葉初期段階にまで伝統的な立場を示す「勝坂系」（山口 2000）を中心にして、中期中葉末における土器群の在り方を捉えてみる。

縄文土器論において、一つの型式の終末的様相が次代の様相へ継続する現象は常に観測されており、各時期を土器型式で区分した場合、必ず直面する課題である。また、中期土器群は個々の土器においても、一個体に画期の文様や異系統の文様要素が観察されるといつても過言ではない。どの段階で区分するのか、文様要素で区分するのか、土器組成で分けるのか、各時期・各段階に研究成果が反映されている。その成果を元に、各時期の集落論や環境論なども構築されているはずである。縄文土器論は縄文時代研究でも重要な分野であり、とりわけ編年論を推し進め、様々な土器群の区分基準を明示する分析が、土器研究者に与えられた到達点の一つと見ることも可能である。

土器そのものは連続性を持った属性で変化する資料である。土器型式学は、この連続性に地域様相と土器文様変化の要素を観察し、変化の区分を明示するべき課題を持った分野である。

一個体の土器を観察する際にも、器形・文様構成、文様要素、さらに胎土や色調も併せて観察されるように、複合的な視点で扱われている。これが、一つの文様要素のみを扱い、細分を重ねたとしても、観察する土器量に比例して細分案が蓄積していくことになり、膨大な区分基準が用意されることになる。無論、現在の縄文土器研究は、細分案イコール型式区分案にはならないように、研究者各自が変化の単位をまとめられており、広域編年も視野に入れた研究が可能になりつつある。

変化の単位を1個体の土器で確定せず、遺構一括資料などある程度の纏まりとして抽出した土器組成をもって、系統の連続性や地域性を見いだし、一つの単位として併行する土器群との地域性を把握するべきであろう。本稿で扱う、勝坂式終末的な様相が次代の様相へ継続していく現象も、土器組成中に反映されて見いだすことができるはずである。

筆者も一遺構より伴出する土器群を一単位として捉え、時間軸を与え、型式学的研究に準拠しているが、遺構の在り方や出土土器の残存率などに大きく左右される問題があり、盤石の考え方ではない。今後は、一遺構の出土土器組成を扱う際には、ある程度「質量的」なバックデータによる保障も踏まえて、考えなければならないだろう。例えば、一遺構内の破片資料全てを分析対象とする「総量把握」方法に関しては、筆者自身も行ってい

る出土土器整理方法ではある。一遺跡、一遺構の出土土器の傾向が把握され、有効な整理方法の一つと考える。しかし、全ての土器片の分類に関して、分類者の恣意的な考えも介在し、また体部破片などでは判断できない土器群も多数存在するのも事実である。どの程度までの細分・分類が有効なのかは、今後のデータ蓄積を踏まえて、方向性をまとめなければならないだろう。

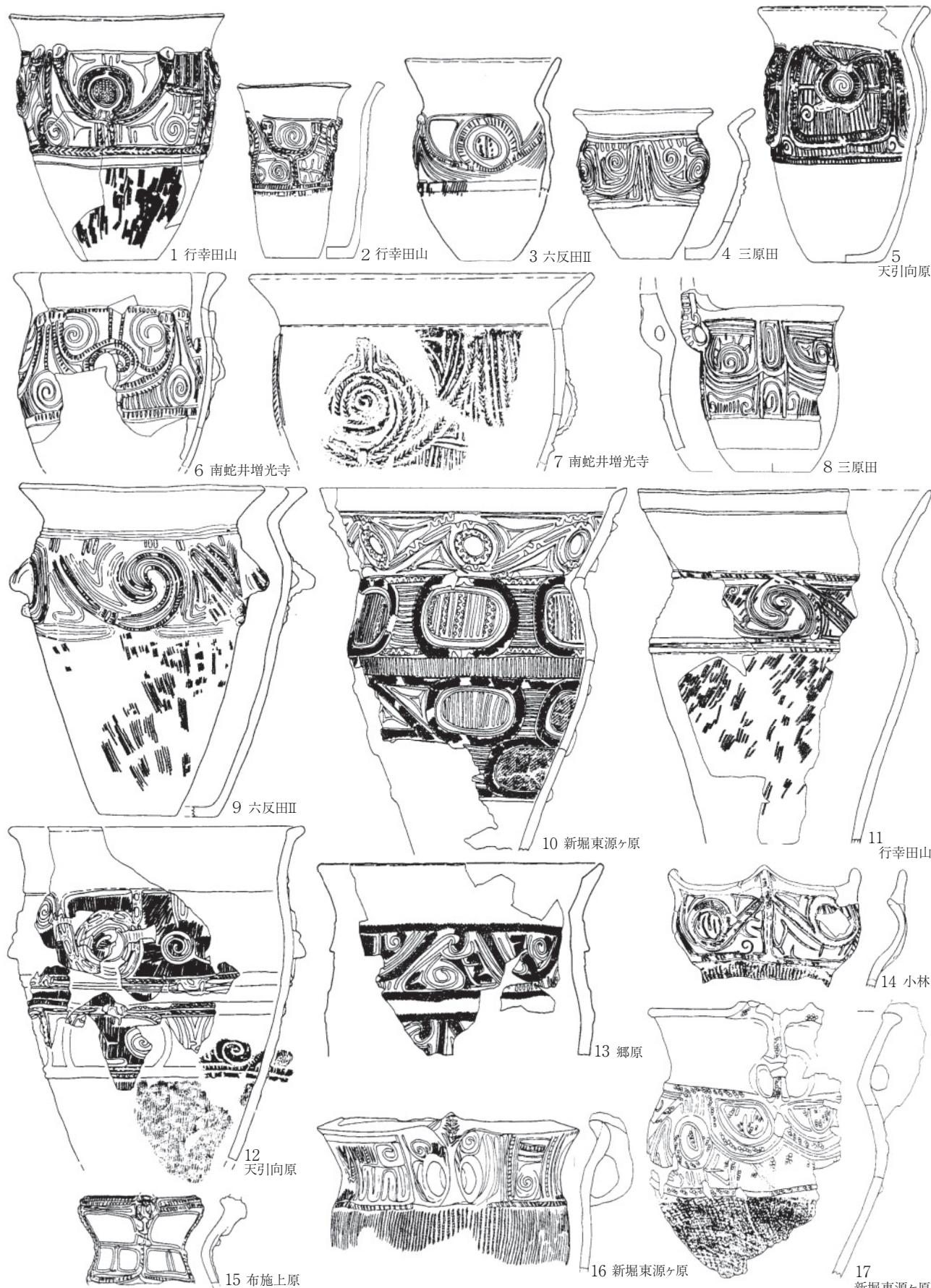
本稿では、遺構一括資料は現在の縄文時代集落遺跡の調査においても、最も有効かつ実証的な単位と考え、県内縄文時代中期中葉末～中期後葉初期の土器様相を扱っていく。

1. 「勝坂系」とは

筆者はかつて、群馬県内で勝坂3式終末とされてきた土器群に注目し、勝坂3式終末段階より加曽利E I式新段階にまで勝坂式の系譜をひきつづけ、変化を重ねながらも継続する様相を提示した。従来、勝坂3式終末とされてきた土器群を勝坂式とはせずに「勝坂系」として位置付けた（註1）。群馬県では、勝坂3式より加曽利E I式古段階においては、「焼町類型」や「三原田類型」、中峠式、加曽利E I式などが一つの遺構より共伴する現象が顕著であり、一遺構におけるこれらの土器組成中に「勝坂系」が共伴する実態が数多く報告されていたのである。前稿では、土器組成の比較は、群馬県北部の布施上原例と新潟県原遺跡例を挙げるに止まった。これは「勝坂系」と共伴する他の土器群との様相差が顕著な布施上原例と原遺跡例を比較し、異系統土器群の共伴実態を鮮明に比較する狙いがあったためである。また、「勝坂系」の文様構成の観察を優先したため、共伴する土器群を提示せず、個々の土器事例の解説に終止した（註1）。さらに、「勝坂系」の抽出に関しては、特徴的に出土する「樽状深鉢」・「甕状深鉢」（以下樽状深鉢）を中心に取り上げており、その他の「勝坂系」に比定される土器は殆ど掲載されなかった反省が残る（1図）。

その後良好な出土例が多々報告され、また筆者も該期土器分析を試みた際に「焼町類型」や「三原田類型」とほぼ同列の扱いで、「勝坂系」を土器群の一名称として固有化してきた経緯がある（山口 2001・2004・2009など）。

小林謙一氏は、筆者の言う「勝坂系」に対して、幾つかの問題点をあげ、「勝坂系」土器が、系統的な区分なのかリダクションされたサブタイプに特殊化して用いた名称なのか不明な点が、問題として残る。加曽利E I式期に残ることが明確な「樽状深鉢」の勝坂系土器は、「勝坂4式」なり「続勝坂式」なりと、改めて型式設定することも考慮する必要はあるかも知れない。型式としてのまとまりを用いないのであれば、「布施上原類型」なり「布施上原タイプ」なり亜型式としてまとめた方が良



1図 前稿提示の「勝坂系」土器(山口2000より) 縮尺・順不同

いように思う。」と指摘された（註2）。確かに「勝坂系」は系統的な型式の延長には存在するものの、その実態は変化が捉え難い一群として認識される。勝坂3式内部の複雑な類型群の絡み合いが、加曾利E I式古段階にも継承され、類型独自または類型相互の変化が存在しているのである。さらに、サブタイプとしての位置付けにも苦慮する。ましてや編年型式としての扱いとするには、該期土器組成の在り方を整備する分析が優先され、「勝坂系」に関する型式・類型としての纏まりを提示するには控えなければならない資料状況であった。これは現状も同様で、幾つかの良好な一括資料が増加した今も、「勝坂系」の名称に関わる作業は、土器組成の整備後に考えるべきと思っている。

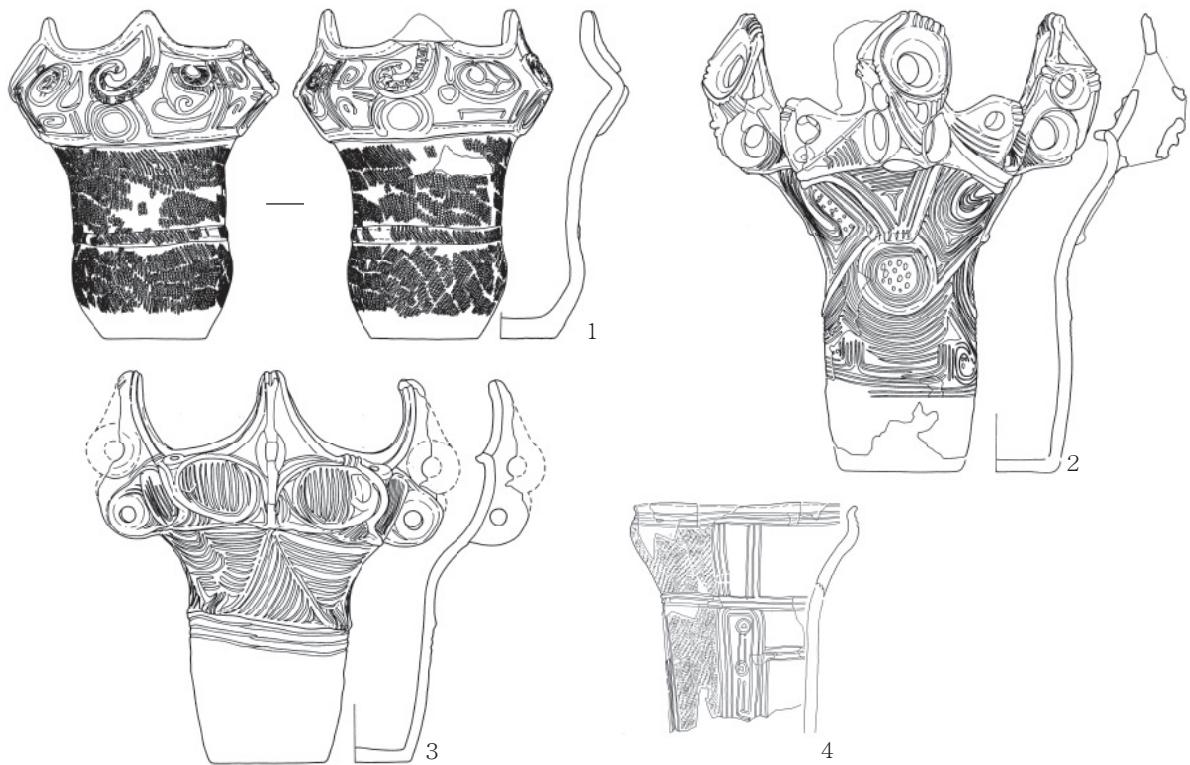
2-1. 共伴資料の確認

前稿後、筆者は幾つかの分析で「勝坂系」を使用してきた。主に、出土土器組成を考える際に、「焼町類型」や「三原田類型」と共に伝統的な土器群の一つとして「勝坂系」を位置付けてきた。今回は、出土土器組成中、あらためて「勝坂系」を中心に、県内を中心として共伴する土器群を確認してみたい。また、前回の「勝坂系」の分析で取り上げることのできなかった、樽状深鉢以外の「勝坂系」を、その後の調査報告で明らかになった土器群を中心に見ていく。個々の該期土器組成を見ていくにあたり、各組成に段階名を充てるが、確定的ではなく、今後の検証では変更する余地がある。一応、勝坂

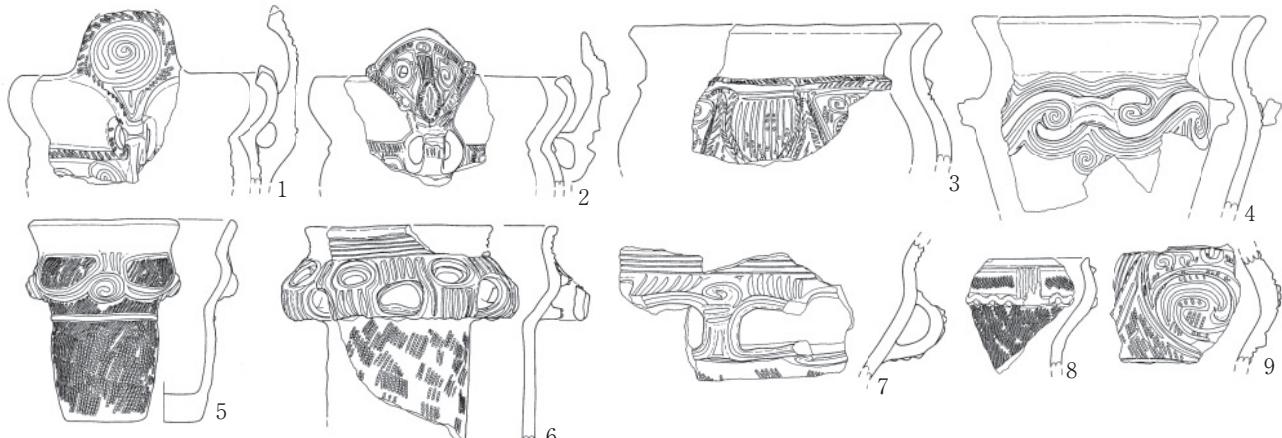
3式終末段階・加曾利E I式古段階・加曾利E I式新段階として述べるが、判断に苦慮する組成もあり、また地域差を考慮すべき組成も見られる。また、文中「三原田類型」という名称を多用するが、中峠式再設定の際（大村他1998）提示された「三原田型深鉢」や山下氏の三原田式（1998）とほぼ同じ内容といってよい。いわゆる、赤山氏や長谷川氏が説く「三原田式」とは内容を異にする。さらに、大村氏らが設定した「三原田型深鉢」は中峠式内部の類型であり、筆者も近い考えではあるが、ここでは、群馬県の地域性を具体的にするために「三原田類型」という用語を使用する。地域性や土器の系統性を述べるのに、「三原田式」という型式名称は必要ではなく、類型名が妥当である。

最初に県内でも有数の中期遺跡を包蔵する赤城山南麓～南西麓域に位置する前橋市富士見町旭久保C遺跡、渋川市北橋町下遠原遺跡、道訓前遺跡の組成を見てみよう。旭久保C遺跡6号土坑：正式報告はないものの、道訓前遺跡報告書文中（長谷川2001）で実測図の紹介がなされ、最近追加資料を加えた分析がなされた土坑一括資料である（福田・山口2009）。前橋市富士見町に所在する遺跡である。

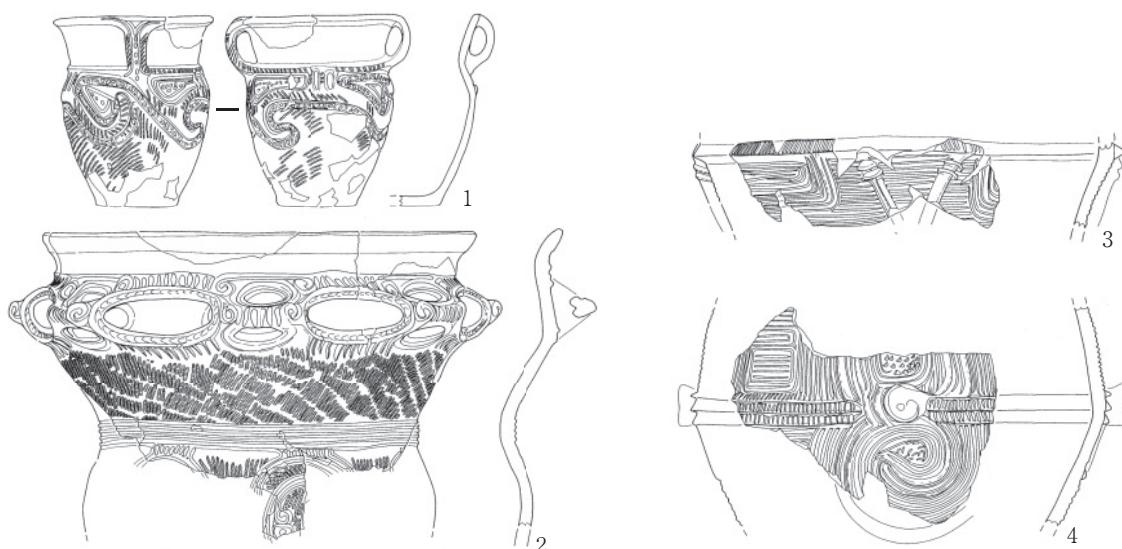
1を筆者は勝坂3式として位置付けた（山口2004）。また、追加資料の検討では、搬入品の可能性も指摘し、県内類例の検索が及ばないため詳細な言及を控えた。県内では該期共伴資料における、1にみる標準的な勝坂3式の伴出例は少なく、かえって扱いが難しい土器ではあ



2図 前橋市旭久保C遺跡6号土坑出土土器（福田・山口2009）



3図 渋川市下遠原遺跡A区JP8号土壙出土土器(長谷川2008)



4図 渋川市道訓前遺跡J-23号住居跡出土土器(長谷川2001)

る。その意味でも、本土坑資料の位置付けは極めて重要であり、1を勝坂3式と位置付けることによって、3式の消長を捉えることも可能になった。また、「焼町類型」(2)、波状口縁曲隆線文系の土器(3)、縄文施文キャリパー状深鉢(4)との共伴は加曾利E式成立期あるいは古段階の良好な組成を示すといえよう。「焼町類型」は、道訓前遺跡や川原田遺跡に良好な類例が知られ(註3)、2と共に道訓前例や川原田例の編年的な位置が検討され、概ね勝坂3式-井戸尻式期に該当する結果を得ている(長谷川2001・寺内2004・小林2004・山口2004)。波状口縁深鉢(3)は類例が少ないが、後述する上ノ平I遺跡に同様の例を見ることができる。筆者は「焼町類型」としていないが、今後検討を重ねるべき土器である。4に関しては既に述べているが、勝坂式終末段階の縄文施文の一群と大木8a式終末段階に見る東関東系キャリパー状深鉢との関連を述べている。ここでも、前三者(1~3)に比して、文様も簡素化し収斂化した例としてみておきたい。

下遠原遺跡A区JP-8号土壙:渋川市北橋町に所在する。

径1m程の円形土壙より完形土器(5)などを出土する。破片状態ではあるが、1~3は勝坂3式である。5を中峠式、6は「三原田類型」である。1・2は口縁部が内湾する樽状深鉢で近似する器形であるが、1は隆帶上に縄文施文、2は刻みを施す装飾差を見る。3・4は無文の口縁部を大きく開く樽状深鉢の例と見た。4は隆帶による横位S字状文が体部に連続することから、勝坂式としては疑問が残る。この段階の勝坂3式が変化した土器群の共存と見たい。この組成に通常は「焼町類型」が加わる例が赤城山南麓域における土器組成である。その傾向は加曾利E I式古段階でさらに顕著になるが、例えば道訓前II遺跡JP-9号土壙(長谷川1999)のような「焼町類型」・「三原田類型」・「勝坂系」といった組成が標準的である。同時に、主体となる土器群による組成ではなく、様々な類型群が個別に存在する組成様相ともいえよう。その中で、本例は破片状態とはいって「勝坂系」を複数出土した組成として注意しておきたい。また、「焼町類型」が欠落する様相も注意すべきである。例えば、同じ渋川市六反田II遺跡J-1号住(長谷川1997)の組

成も「三原田類型」・「勝坂系」・中峠式が見られるものの「焼町類型」が組成には加わっておらず、当地域の「焼町類型」多出傾向からみると、非常に興味深い組成である。

道訓前遺跡 J 23 号住居跡：渋川市に所在する著名な遺跡である。「焼町類型」や「三原田類型」の遺構出土例が最も充実した遺跡と言えよう。その中で、加曾利 E I 式古段階の組成として本例を挙げる。1 に挙げた小型深鉢を「勝坂系」、2 は「三原田類型」、3・4 は曲隆線文系土器－「焼町類型」の退化した例と考えた。加曾利 E I 式古段階の組成であり、「三原田類型」・「焼町類型」とともに大型化した深鉢に対し、「勝坂系」は小型深鉢となっている。「焼町類型」に関しては、この段階は消長に向かう段階と見做すことができよう。「三原田類型」は盛期ともいべき段階で、安定的な装飾で個性を發揮した時期である。反面「勝坂系」は、加曾利 E I 式古段階になると、徐々に衰退する傾向が見られ、小型化あるいは文様構成の崩壊が見られる。その意味で、本例の「勝坂系」は小型であり、体部文様も区画化されず、横位に連繋する不規則な文様構成を示す。勝坂 3 式－「勝坂系」の流れの中で、一つの型式の消長を観察できよう。

赤城山南麓～西南麓域の「勝坂系」を加えた中期土器組成 3 例を概観した。「勝坂系」の他に「焼町類型」・「三原田類型」・中峠式などが共伴する実態を観測したが、まず主体となる型式群・土器群が存在しないことが特徴の一つである。個々の土器群が独立した様相で、個性を主張するかのような組成様相である。その中で、「勝坂系」は確実に存在するものの、小型化や文様構成の崩壊現象を示しており、やや客体的な存在を見ることができよう。おそらく、当地域においては、次代の加曾利 E I 式新段階に至ると、「勝坂系」の存在は極めて希薄なものとなるのであろう。言い換えれば、加曾利 E I 式古段階より組成に加わった、中峠式の特徴の一つである口縁部文様帶強調という文様構成が主流となる段階であり、文様構成上根本的な差がある「勝坂系」や「焼町類型」は、徐々に組成から外れていく傾向があるのでないか。

次に、近年資料が充実し始めた、群馬県北西部の吾妻川流域の資料を見てみよう。

上ノ平 II 遺跡 31 号住居跡：長野原町に所在する遺跡で、近年発掘調査され、報告書も刊行された（瀧川 2008）。31 号住居跡出土土器に関しては、筆者が再検討を加えた経緯（山口 2009）もあり、その土器様相は、様々な課題を提示している。

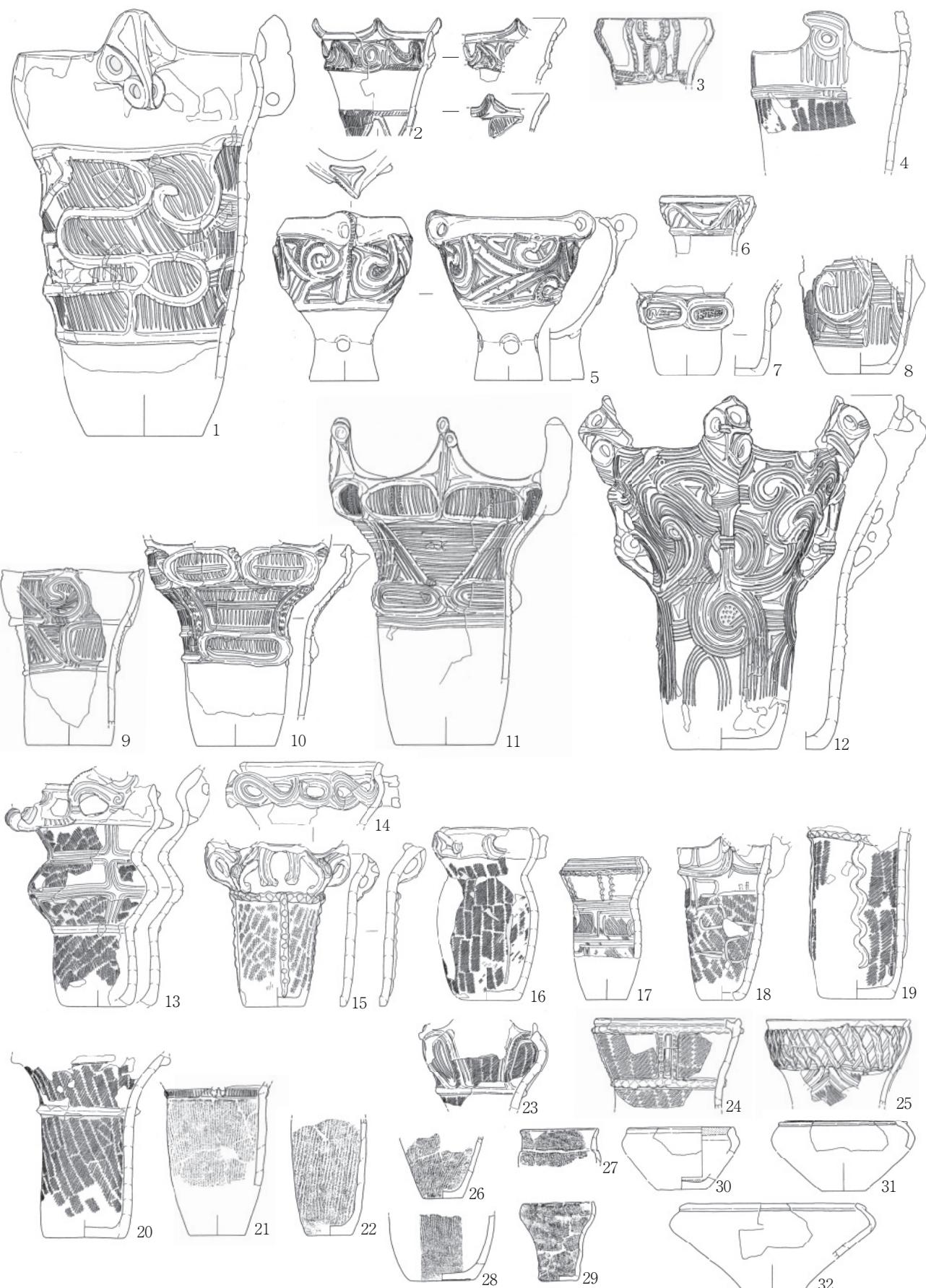
31 号住居跡出土土器は多量であり、そのうち個体図示された 32 個体を掲載する。土器の出土状態は、炉体土器もなく床直出土例も少ないが、埋土中にまとまった出土状態を示しており、一括廃棄によるものと判断した。充実した土器組成であり、1～5 を「勝坂系」と判断した。

6～12 を曲隆線文系の土器群、12 は「焼町類型」である。13～28 は縄文施文の一群である。14 は「三原田類型」と見ることができよう。19～22・26～28 は体部のみの残存のため、あるいは「勝坂系」に属する判断もあるが、判然としない。

「勝坂系」を見てみよう。1 は大型の深鉢で口縁部突起による正面觀、体部文様の区画文化など、勝坂 3 式の系譜を引いた土器である。2 は口縁部文様帶が画され、体部文様も区画化された、やはり勝坂式の文様構成を保持した土器といえよう。3 は内湾口縁部の加飾隆帶から勝坂式の系譜を考えたが、該期土器組成中に散見される資料であり、加曾利 E I 式古段階内では「勝坂系」とは別の系譜も考えられよう。4 は信州地域に少なからず見受けられる個体である。あるいは、搬入品と考えられよう。5 は台付き深鉢で体部一帯構成の例である。31 号住の「勝坂系」で最も勝坂式の文様構成から外れた様相を呈すものの、渦巻文による单位文化や半肉彫手法による文様描出など、勝坂式の系譜を引く例と判断した。同様な台付き深鉢の出土例は、例えば新堀東源ヶ原遺跡 164 号住居跡（大賀他 1997）などで見ることができる。

3 は検討を要するが、1・2・4・5 とも多様な勝坂 3 式文様構成の範疇に入り、単体あるいは破片資料として出土した場合、勝坂 3 式としての判断を加える個体である。本例のように、共伴資料との整合を考えるに、初めて加曾利 E I 式古段階に属する「勝坂系」と見做すことができる。型式の継続性、次代への残存形態を考えさせる一群である。特に 1 は大型であり、当地域における「勝坂系」の安定性を窺わせる存在である。

共伴資料として、6～12 の曲隆線文系土器群、13～19・23～25 の縄文施文の一群が特徴的であり、他地域では類例の少ない土器を見る。その中で、9・10 の波状口縁深鉢は先に述べた旭久保 C 6 坑（3）を類例として取り上げ、口縁部・体部区画文構成という単純な文様構成に注目し、「焼町類型」や「勝坂系」の文様を受容しやすい形態として考えを巡らせた。本稿では多くを触れ得ないが、「焼町類型」にも類似する一群であるため、今後の検討を要しよう。13～15 に口縁部に立体的な隆線装飾を設けた土器を集めた。14 は「三原田類型」であり、12 の「焼町類型」とともに赤城山西南麓域で組成に加わる土器である。13 は類例が少ない。大木 8 a 式新段階に見られる中空状装飾を施す口縁部文様帶に類例を検索するべきであるが、体部器形や方形状の区画文構成などは、大木 8 a 式の文様構成ではない。「三原田類型」や「勝坂系」の影響と見るべきであろうか。15 に関しては、三原田遺跡 8-C38-4pit や道訓前 II J-1 住、五代伊勢宮 IV D-227 壤に口縁部橋状装飾に近い例を見る。E I 式成立期より古段階に発生した一群であるが、別種の類型名が必要であろう。その他の縄文施文の土器



5図 長野原町上ノ平I遺跡31号住出土土器(山口2009)

(16～28) も特徴的であるが、個々の解説と分析は稿を改めたい（註4）。

上ノ平18号住居跡：5個体が個体図示されているが、破片図示で「焼町類型」も報告されている。1は「勝坂系」樽状深鉢である。大型の深鉢で、横位隆線で画された体部文様に、大型の環状意匠を配し斜位・弧状隆線が繋ぐ。所謂「人体状意匠」が変化した形態である。2も「勝坂系」の範囲に属する可能性がある。波頂部突起より体部上半に把手あるいは突起を付す痕跡を見るが判然としない。3は報告では「焼町類型」と判断されているが、体部下半の区画文の在り方は勝坂3式や「勝坂系」に近い文様構成である。31住にみた波状口縁深鉢（5図10・11）と同様の在り方であろうか。4は中峠式と判断した。口縁部文様帯を強調し体部は懸垂文構成を呈する。小型の渦巻状突起を口縁部下端に配すが、強い区画線が無い特徴がある。横位沈線と交互刺突文を重ねる様相は、やや新しい要素であるが、E I式古段階と判断した。5は半肉彫手法による文様描出で、北陸系の土器に近似するが、体部の一部に縄文が観察され、該期の在地土器群で少數ながら存在する土器に類似する（註5）。

このように、吾妻川流域の該期土器組成で「勝坂系」が加わる住居跡一括資料を見た。充実した出土量を見せる31号住は「勝坂系」以外に「焼町類型」と隆線施文の波状縁深鉢、大木8a式の変形形、「三原田類型」、縄文施文の在地系土器群で組成を構成する。また18号住では樽状深鉢の「勝坂系」、「焼町類型」の変形、中峠式を見ることができた。両住居跡には時期差が存在しているものと思われるが、吾妻川流域の該期土器組成としては、基本的には赤城山西南麓域と大きな差は無いものの、文様構成が踏襲された「勝坂系」が安定している傾向が見られる。これは信州地域と接している当地域の特性と見ることができ、加曾利E I式古段階において、信州地域の土器組成変化との連動も視野にいれておきたい。また、「勝坂系」の量的な安定とはいうものの、抽

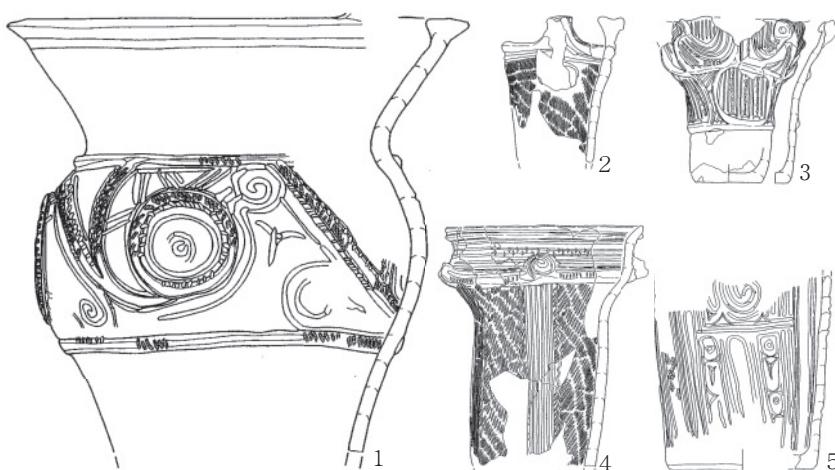
出した個体は、それぞれが勝坂3式内部の諸類型が個々に変化し併出した状態と判断できる。一タイプのみの共伴ではなく、「勝坂系」内部の複数類型が共伴する実態が見出せよう。

次に地域が大きく異なるが、群馬県東部の該期土器組成を概観する。

瀬戸ヶ原遺跡J-2号住居跡（7図）：旧大間々町に所在する。J-2号住は浅い掘り込みであるいは2軒の重複住居、ないしは拡張住居とも捉えられ、出土土器の一括性は慎重に扱わなければならない。しかしながら報告された個体は、ほぼ同時期と捉えられ、本稿では一括資料として考えておきたい。

1は円筒形の深鉢に似るが、口縁部が短く開くため、長胴形の樽状深鉢と考えた。体部中位の横位隆線で画され、上半部に隆線による方形状区画文が設けられ、隆線弧状意匠などが配されているように、文様構成上も勝坂3式の系譜である。2・3・5・6は口縁部文様帯が強調されており、中峠式の範疇で考えておきたい。2・3・6は口縁部に交互刺突文を施しており、「三原田類型」との関係も想定されるが、中峠式の他の類型にも採用される文様要素であり、厳密には「三原田類型」とは判断できない。1以外は体部縄文（撚糸）施文であり、キャリパー状の器形を呈し、口縁部区画文を配する3・5・6を収斂化した様相として位置付けた。おそらく、加曾利E I式成立期あるいは加曾利E I式古段階にかかる可能性もある。中峠式及び類似する一群で占められた土器組成といえよう。その中で勝坂3式の系譜を引く1は「勝坂系」と判断でき、中峠式主体の組成の中で、1個体のみの「勝坂系」は客体的な存在と見ることができる。尚、4・7は文様要素も少なく、勝坂式あるいは阿玉台IV式との関連も想定しなければならず、判断を控えたい。

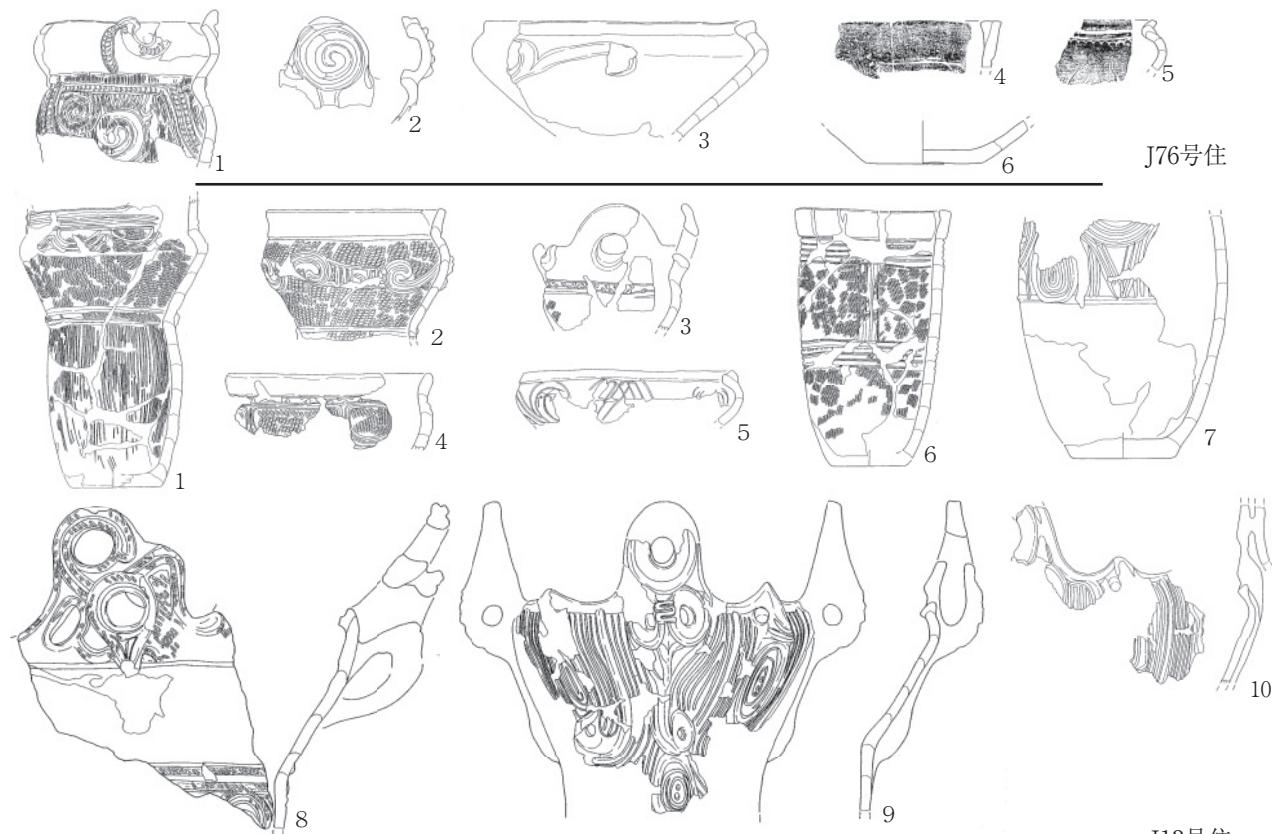
三和工業団地II遺跡J-76号住（8図上）：遺跡は伊勢崎市に所在する。76号住は円形で重複もない良好な遺存度であるが、出土土器は少ない。破片資料主体のため、土器組成として傾向は把握しづらく、一括資料としては位置付けられないが。1の勝坂3式は当地域としては、出土が少なく、他地域では比較的安定的な様相を示す個体である。口縁部が内湾する樽状を呈す深鉢である。体部一帯構成で、隆線による渦巻状意匠が配される。おそらく口縁部には2に類似する突起が付されるのである。類例としては適当ではないが、下遠原例（3図1・2）との共通性も考慮したい。共伴する3の浅鉢は、勝坂3式段階から加曾利E I式古段階に見る例である。その他の破片資料も勝坂3式と



6図 長野原町上ノ平I遺跡18号住出土土器（瀬戸ヶ原2008）



7図 みどり市大間々町瀬戸ヶ原遺跡J-2号住出土土器(竹内1999)



8図 伊勢崎市三和工業団地II遺跡J76号住・J13号住出土土器(福島・山際 2004)

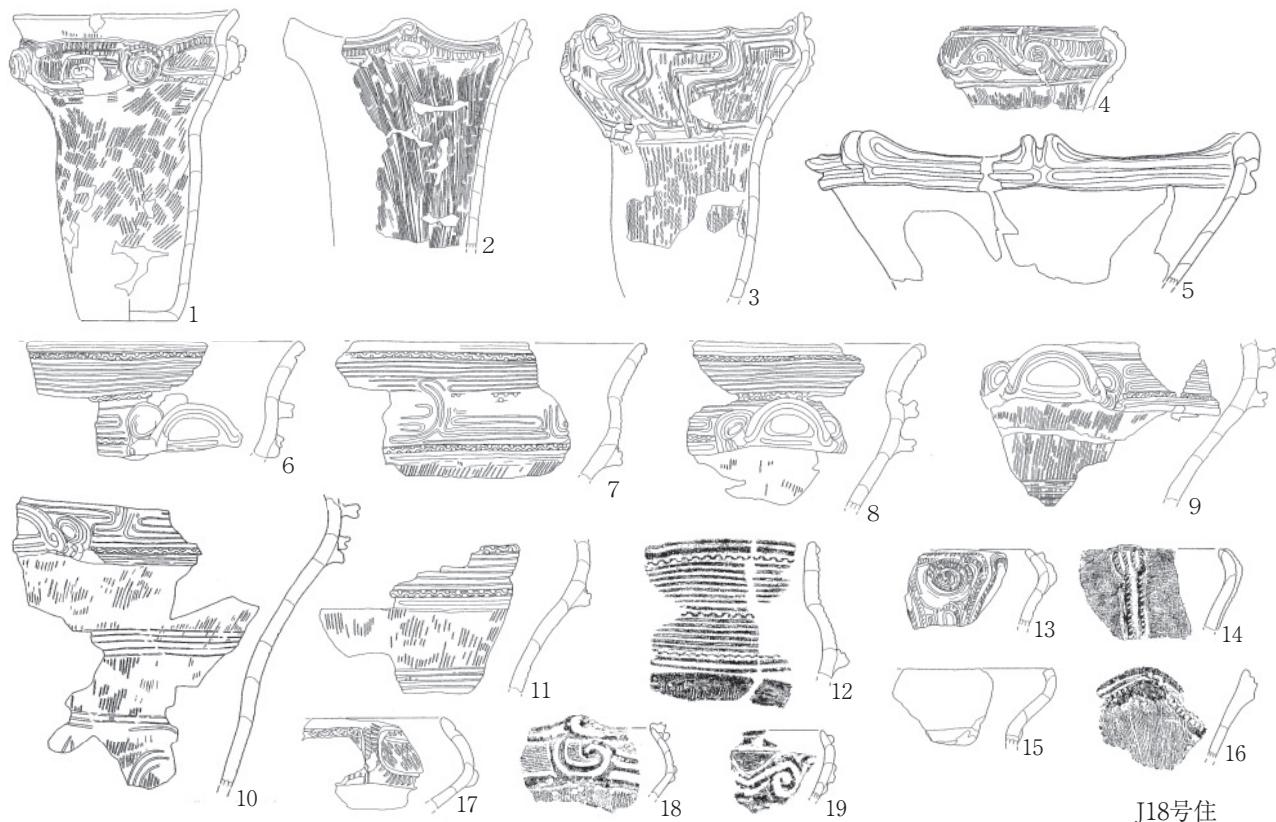
の関連性を想起させる土器である。

三和工業団地II遺跡J-13号住（8図下）：重複住居跡2軒など遺存度は良くないが、出土土器群は良好な一括性を示すものと判断した。口縁部が無文で肥厚し、体部沈線施文による方形区画文構成の6を「勝坂系」と見たが、良好な例ではない。

ただ、1の縄文施文キャリパー状深鉢や2の中峠式、7・9・10の「焼町類型」、3・8の阿玉台IV式（註6）

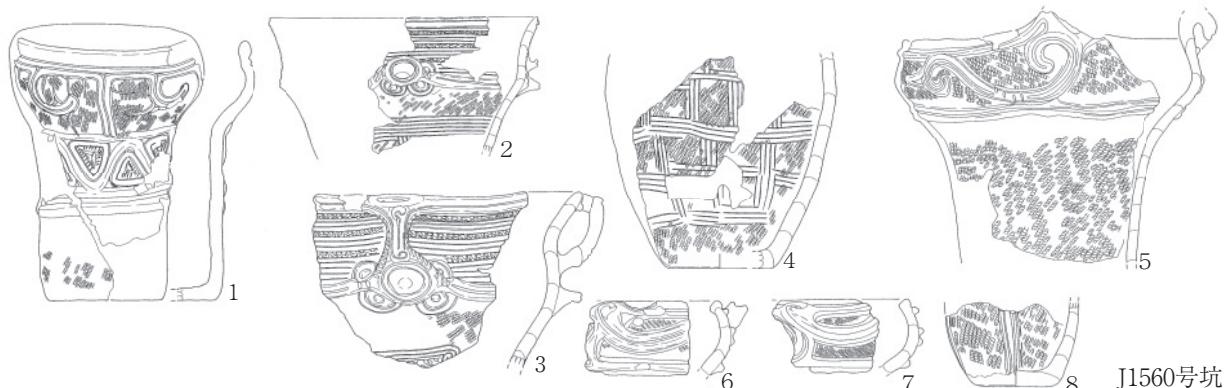
との共伴は重要で、群馬県東部における加曾利E I式古段階の色彩豊かな共伴例と捉えられ、先に述べた下遠原JP 8塊（3図）に続く組成といえよう。1は在地的な様相を示すが口縁部に文様が集中しており、収斂的な文様構成である。9の「焼町類型」は口縁部環状突起以下の縦位連接する双環状突起という特徴は、2図の旭久保C 6坑2より若干新相を呈す文様構成であろう。4も口縁部区画文が配されている。

三和工業団地Ⅱ遺跡J-18号住（9図上）：土坑との僅かな重複があるのみで、良好な遺存度といえよう。共伴資料も揃う。個体としての「勝坂系」の出土は見られないが、「三原田類型」（6～12）が共伴する。6～11は同一個体であろうか。道訓前遺跡では、同様の「三原田類型」がJ-2住やJ-12住などで加曾利E I式新段階の土器と共伴している。本例はその様相よりも若干古くなると思われるが、1の中峠式や3の加曾利E I式は古段階よりも新段階の様相に近い。2も加曾利E I式新段階の組成に入る波状口縁の深鉢であろう。4の資料は混在であろうか。この段階では「勝坂系」は希薄な存在なのか、13・14の破片資料で存在を窺わせているのみである。加曾利E I式新段階過渡期の土器組成と位置付けたい。



三和工業団地Ⅱ遺跡1560号坑（9図下）：上端の一部を他の土坑に重複されるが、本土坑が深く、良好な一括資料といえよう。1は勝坂3式の文様構成を保持した個体である。口縁部は平行沈線による意匠文配置ながら、体部は隆帶で横帯文区画され、三角区画文が交互に配される。ただ、このタイプの「勝坂系」はあまり多くはなく、「勝坂系」としては、古いタイプの勝坂式を踏襲した例なのか問題が残る。勝坂式・「勝坂系」としても変容を重ねた様相である。

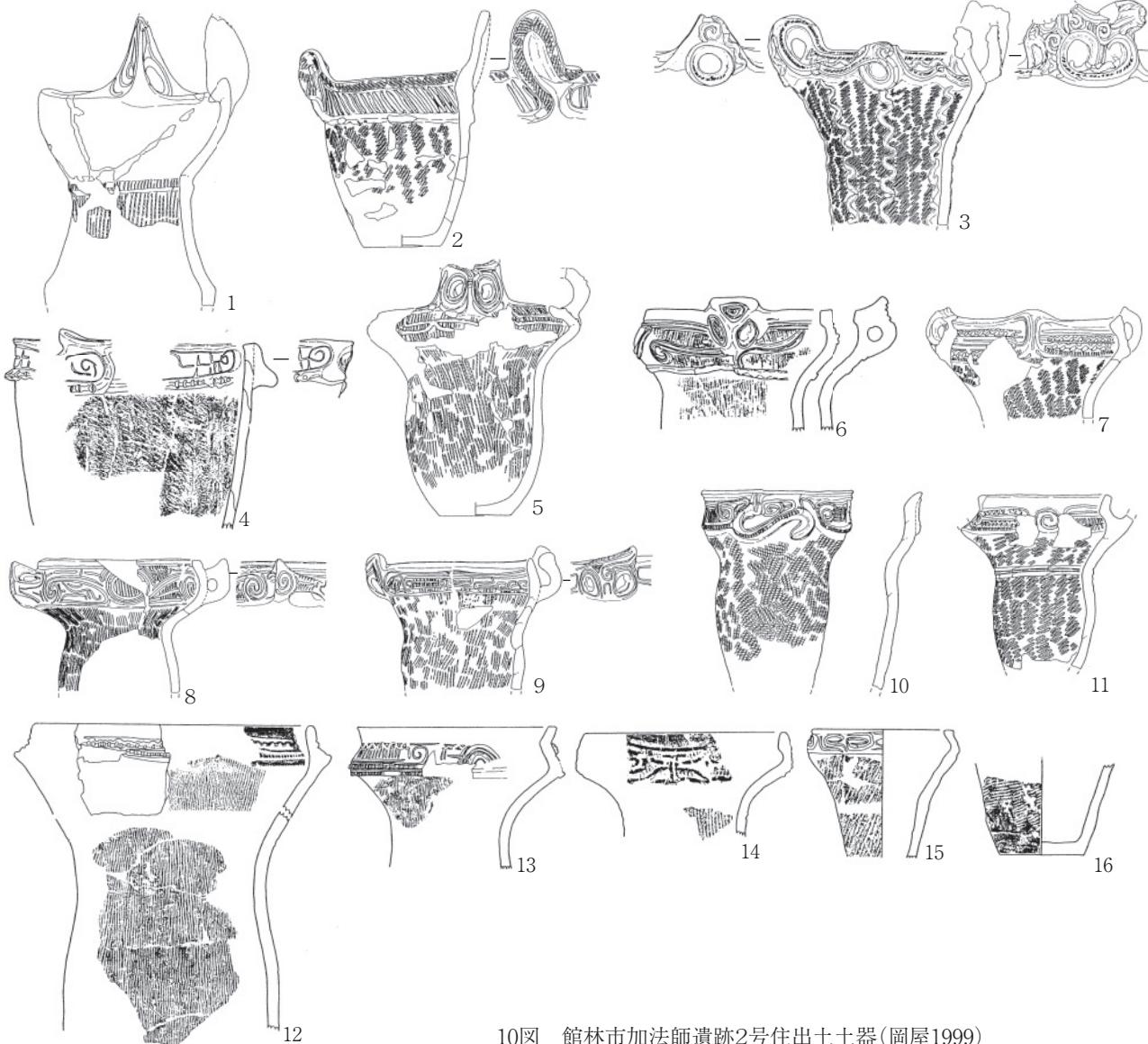
共伴する2～4はJ-18住同様加曾利E I式新段階に伴出する「三原田類型」である。ただ、J-18住よりもやや新しい段階であろうか、5～8の加曾利E I式は18住3よりも新しく見える。加曾利E I式新段階ではあるが、J-18住では見られなかった勝坂式文様構



9図 伊勢崎市三和工業団地Ⅱ遺跡J13住・J1560号坑出土土器(福島・山際 2004)

成を保持する土器が共伴する一括資料である。

加法師遺跡2号住居址（10図）：群馬県東端に位置し、埼玉・栃木県と接し茨城県とも近距離にある館林市に所在する。隅丸方形を呈する重複もない住居で、中央から南にかけて一括廃棄された状態で多量の土器が出土している。良好な一括性といえよう。1は大型突起を付す屈折底の勝坂3式である。共伴資料から「勝坂系」とみたが、あるいは搬入品の可能性もある。信州地域の井戸尻2式に多々見るタイプである。2は板状突起に隆帶上に繩文施文する特徴から阿玉台IV式に比定されるのであろうか。3は大木8a式新であろう。口縁部中空状突起が付され、口縁部及び体部は蛇行隆線が付される。4は判断を控えたいが、口縁部文様帶の上下陰刻状沈線は、勝坂3式からの系譜であろうか。5～15は中峠式及び周辺の土器群と位置付けた。各々が口縁部文様に特徴があり、7・11～13の口縁部には交互刺突文が施される。



10図 館林市加法師遺跡2号住出土土器(岡屋1999)

例えば「0 地点型深鉢」としては5・7・9・11、「台耕地型深鉢」は6・8・10などが見られ、型式内類型群が共存する様相である。組成としては、大木8a式新・中峠式・阿玉台IV式・「勝坂系」による土器群の組合せであり、中峠式に組成の中心が見られよう。これは例えば、栃木県寺野東SK333などに近い組成で、本遺跡の地理的な条件が2号住土器組成に具体化しているといえよう。いわば、栃木・茨城・北・東関東の該期土器組成に極めて近い組成である。しかしながら、1の「勝坂系」が搬入とはいえ組成に加わる様相は極めて重要で、「勝坂系」の広域な分布と同時に組成内の客体的土器としての様相も把握できよう。加曾利E I式古段階の所産と考えた。

群馬県東部地域の該期土器組成を見たが、この他にも笠懸町清泉寺裏遺跡や桐生市三島台遺跡など中期大型遺跡の資料があり、将来的には、赤城山西南麓と同等の資

料充実が果たせるものと期待される地域である。土器組成は、赤城山西南麓域や吾妻川流域と比較すると、「勝坂系」が少量で客体的な存在である。また、「焼町類型」や「三原田類型」も「勝坂系」同様、やや少数派ではあるが、確実に組成に加わる傾向を見せており、県内加曾利E I式古段階の様相として、ある一定の傾向は把握できよう。その中で、館林市加法師遺跡出土土器組成は、北・東関東的な組成であり、赤城山西南麓の組成とは大きな地域差が見出せよう。

以上のように、県内の幾つかの中期遺跡より勝坂3式終末段階から加曾利E I式古・新段階における、勝坂式や「勝坂系」が加わる土器組成を概観した。その結果、土器群の纏まりとしては、「勝坂系」の他、「焼町類型」、「三原田類型」、中峠式を中核に大木8a式や阿玉台IV式が加わる様相が把握された。ただ、多くの土器組成に目立つ事象として、組成の中核となる土器群の存在が無く、各型式・類型が個々に併存する赤城山西南麓の組成と同様の在り方を見せてている。その中で、吾妻川流域では「勝坂系」がやや優勢であったり、県東部の組成は中峠式に偏る傾向が観測された。地域性を大きな要因としたいが、加曾利E I式新段階にかけて、口縁部文様帯を強調する中峠式やその周辺の土器群が県内に浸透する現象を踏まえると、東部地域の中峠式優勢様相が加曾利E I式文様の受容に大きな影響を果たしたものと考えておきたい。

県内の「勝坂系」は、勝坂3式より継続した伝統的な文様構成を保持しつつ、中峠式に代表される口縁部文様強調構成の一群が存在するため、文様構成上の影響を相互に与えながらも、徐々に消長を迎えるようだ。しかしながら、伝統的な土器群が土器組成の一隅を継続する背景は、地域性以上に、伝統的土器群の位置が、該期の土器社会において重要な位置を保持したと捉えられよう。

無論、その他の「焼町類型」や「三原田類型」も同様に伝統的な立場を保持しつつ、加曾利E I式古段階～新段階で消長を迎える。これら伝統的土器群の消長速度が一定ではなく、そのことが地域毎の該期土器組成差となって現れているようだ。

2-2. 共伴資料の確認

ここで、勝坂式の主要な分布圏域である南関東の該期土器組成を見てみよう。埼玉県の該期資料を選ぶが、群馬県と近距離にある本庄・児玉地域など近距離にある県北部の遺跡は、群馬県の土器様相と類似する傾向があり、今回はやや距離を置いた狭山市丸山遺跡と飯能市加能里遺跡、中郷遺跡を選んだ。他にも埼玉県内には良好な資料が存在するが、丸山遺跡や加能里遺跡では、「三原田類型」や樽状深鉢の出土が報告されており、群馬県の該

期土器組成との比較も可能なため、本稿で扱ってみたい。狭山市丸山遺跡2号住居跡（11図）：円形の住居跡南側で大量の土器が一括廃棄された出土状態で、一括性に富む良好な資料群である。30個体が個体図示されている。1が炉体土器である。円筒形で体部上半に区画文を配する一群（2～5）、口縁部が内湾し突起を付す一群（6～8・11・15）など区画文構成の勝坂3式が充実する。区画文構成も3式や井戸尻式前半期にみるように安定しており、「勝坂系」に見られる区画の乱れや意匠文の横位連繋も希薄である。また15は、勝坂1式よりみられる重三角区画文構成の系譜で、勝坂式全般にわたって、系統性が追える一群である。14は内湾気味の体部形態で円筒というより、長胴の樽状に近く本住居跡勝坂式の中で、やや変わった器形である。同様に18の口縁部内湾部施文や17・19の沈線のみの施文、24は撫で線による意匠文配置という、勝坂式内部での変化形も組成に加わっている。

本住居跡出土土器群で、一際目を引く個体が25であろう。「三原田類型」と捉えられ、おそらく、群馬県域より南関東への搬入品と考えられよう。内湾する口縁部袋状突起の様相は、三原田遺跡2-33号住（赤山1990）や向吹張J8A住、（羽鳥1987）に見る「三原田類型」に類似しており、特に体部文様が縄文施文のみという例は向吹張J8A住に近い様相である。「三原田類型」体部縄文施文という要素は、あるいは古いタイプに見られる様相かもしれないが、単純な要素のため判断基準にはならないだろう。ともあれ、「三原田類型」は前節でも概観したように、群馬県内ではE I式古段階に盛期を迎える土器群である。「三原田類型」が勝坂3式主体の丸山2号住土器組成に加わる現象は、報告者の石塚氏が指摘されるように、「三原田型深鉢」の成立を、従来考えられていた、加曾利E I式成立期や加曾利E I式古段階から1段階は遡る可能性が示唆されよう（註7）。

このように、丸山2号住出土土器の大半は、区画文や意匠文の崩れも少なく、勝坂3式として位置付けられる。筆者も各個体を個々に観察した場合は殆どを勝坂3式として判断する。しかしながら、この組成中に「三原田類型」25が共伴する実態を加味すると、当地域の勝坂3式の継続性も念頭に置いておきたい。勝坂式の主要分布域の当地域で、勝坂式主体の土器組成が継続する過程での、「三原田類型」の加入として捉えておきたい。

狭山市丸山遺跡7号住居跡（12図）：拡張住居のため、厳密な一括性は弱いかもしれない。当遺跡では他に5号住居跡の該期一括資料が良好であるが、中峠式の出土を重視して7号住を選んだ。浅鉢の出土量が比較的多い組成を見せるが、本稿では深鉢を中心に述べる。1は勝坂3式で炉体土器に供されていた。2～8の様相も勝坂3式後半段階と判断できよう。2・4・5は円筒形土器で



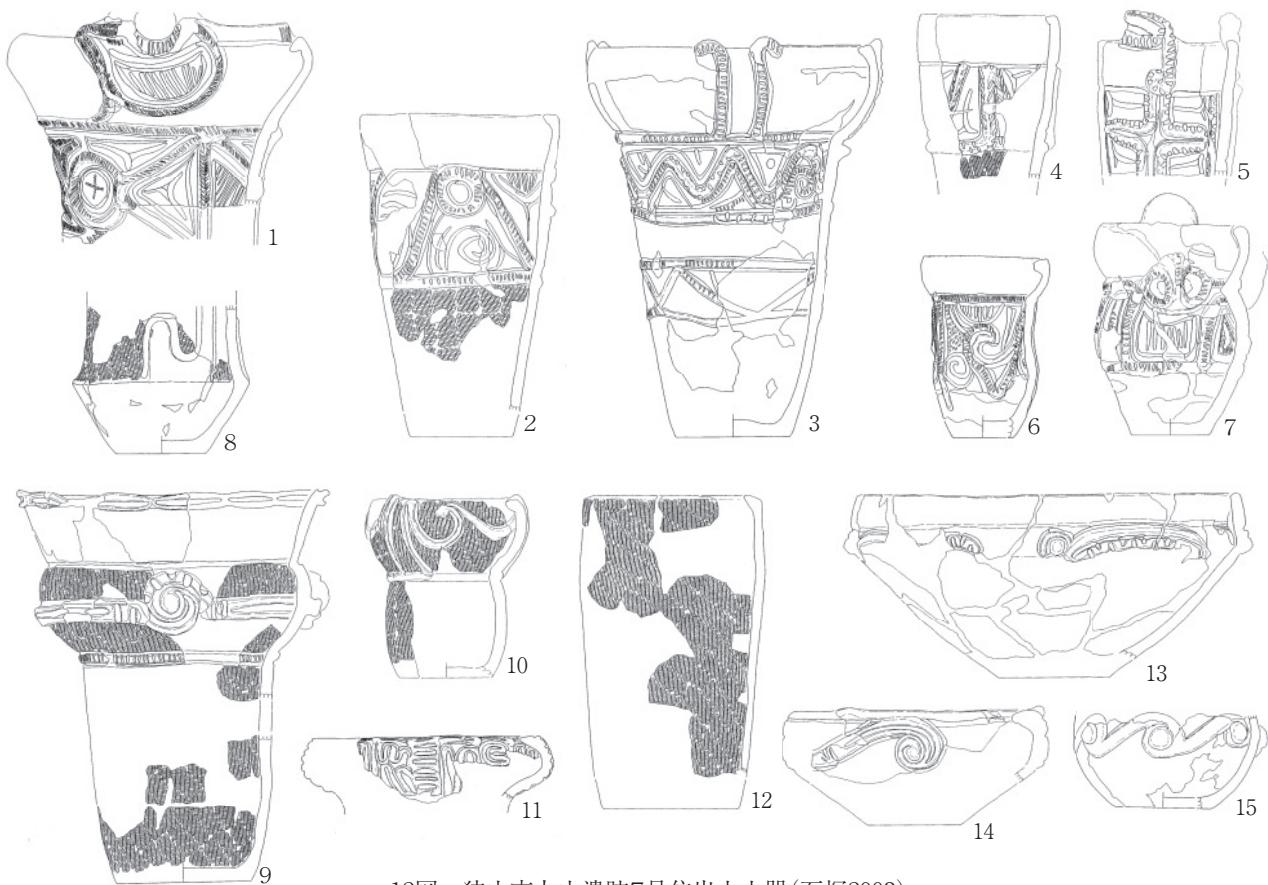
11図 狹山市丸山遺跡2号住出土土器(石塚2003)

ある。2は隆帯による環状意匠と斜位隆線が連繋し、2号住の円筒形土器よりもやや新しい印象を受ける。3も2号住15と同様の重三角区画文系の系譜に置かれる例である。口縁部文様帶は省略され変質しており、勝坂3式後半の様相を示す。6は体部一帯の文様構成で、区画意識が低く、2号住の勝坂3式の体部下半の区画意識の強さに比して、変化を窺わせよう。一方7は体部下半の横位区画線を設け区画文を配している。器形は樽状で勝坂3式後半に見られる例であるが、区画意識は継続しているといえよう。これらの勝坂3式に、9の中峠式「台耕地型深鉢」が共伴する。口唇部の鎖状隆帯の有無など、やや様相の差はあるが、下遠原例（3図5）との類似性もあり、群馬県内では「三原田類型」と共伴する土器と判断されよう。おそらく10も該期の縄文施文をする例である。口縁部に配された隆線が反転する意匠を示しており、曲隆線文系土器などに用いられる文様要素である。11に関しては判断を控えたい。あるいは摺曲文を施す例かもしれない（註8）。7号住出土土器は、勝坂3式後半段階の土器群に中峠式を伴出する土器組成である。このような共伴事例はかつてより指摘されており、中峠式や加曾利E I式の成立に關して問題提起されてきた共伴事例である（註9）。

丸山遺跡7号住は若干ながら2号住より後出する要素が見られるが、2号住と同様に勝坂3式を主体とした土

器組成中に、中峠式が加わる様相として、本住居跡を位置付けたい。勝坂式の伝統が強い地域性が把握できよう。飯能市加能里遺跡21号住居跡（13図）：他の住居跡と重複するが、出土状態には影響が無く、埋土中より床面にかけて大量の土器が一括出土している。炉体土器（25）を持つ良好な一括資料といえよう。丸山遺跡と同様に勝坂3式主体の土器組成である。1～11は円筒形深鉢で区画文や意匠文を配する一群で体部縄文施文する例が多い。12～14は口縁部内湾する例、16～18は甕状・樽状の深鉢である。19・21は口頸部が強く内湾し施文域となるタイプである。22・23は多喜窪タイプである。24の浅鉢、26の口縁部破片は比較的新しい時期の所産であり、E I式の可能性が高い。

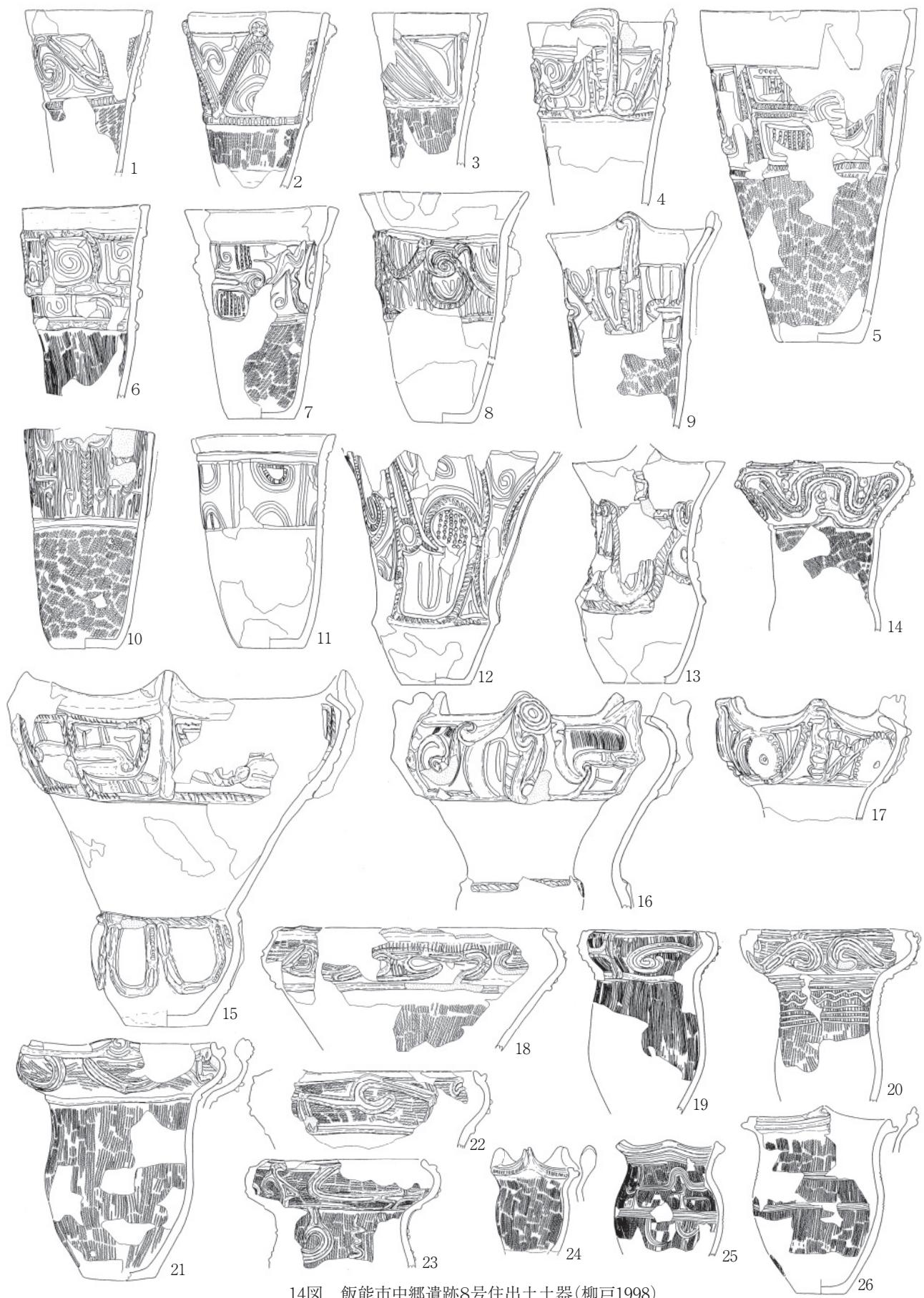
本住居跡出土個体の殆どが、勝坂3式後半段階と考えられる。新しい要素としては、16～18の樽状深鉢は、口縁部は内湾あるいは屈曲し無文で、強く膨らむ体部上半に文様帶を設け、文様帶内には環状意匠や渦巻状意匠が配され弧状隆線や斜位隆線が繋ぐ。いわゆる人体状意匠に近い文様構成である。筆者はこのタイプを中心に群馬県内の勝坂式終末とされる一群を「焼町類型」や「三原田類型」と共伴することから、加曾利E I式成立期より古段階に置き「勝坂系」として位置付けたが（1図）、加能里21号住出土土器群は円筒形土器を見るに、勝坂3式後半と判断できる。本住居跡出土の樽状深鉢を見る



12図 狹山市丸山遺跡7号住出土土器(石塚2003)



13図 飯能市加能里遺跡21号住出土土器(富元1998)



14図 飯能市中郷遺跡8号住出土土器(柳戸1998)

に、群馬県における樽状深鉢の残存状況が想起されよう。

また、19・20 の口頸部内湾部を装飾する土器を見るに、19 の S 字状意匠の在り方や体部方形区画の様相、20 の口縁部突起や口縁部区画文の形態なども、勝坂 3 式後半段階の、勝坂式とは違う系統の土器群との影響と見られ、勝坂 3 式後半段階の異系統要素の介在も予想される。

のことから、加能里 21 住出土土器群は、勝坂 3 式後半の土器を中心とした土器組成中に、群馬県でみる樽状深鉢の母胎とも見るべき一群が伴出する例として注目される。樽状深鉢の広範な分布と残存状況が群馬県の該期土器組成に求められよう。

飯能市中郷遺跡 8 号住居跡（14 図）：半掘の調査ながら、住居跡の深さは 80cm 以上あり、土砂崩れによる堆積土に覆われていたため、一括資料としては良好である。出土量も多く、50 個体もの土器が図示されている。本稿では、深鉢を中心に主な個体を図示するに止める。

1 ~ 11 は円筒形深鉢。全体的に体部の開きがやや強い傾向がある。沈線施文の 11 以外は、体部下半の横位隆線が設けられ文様帯を画している。文様帯内は区画文や意匠文が配されており、勝坂 3 式終末の様相をそのまま継続した一群である。その中で 7 ~ 9 は他の一群に比べ口縁部の開きが強く、特に 8 は群馬県に見る「勝坂系」樽状深鉢に類似する文様構成である（1 図 5 など）。その他の勝坂式では 12・13 が屈折底を呈する例として位置付けられよう。口頸部内湾部に装飾する顕著な例は無いが、14 などに関連性が想起されよう。先に挙げた、加能里 21 号住と同様に多喜窪タイプ（15 ~ 17）なども共伴しており、勝坂式を主体とする土器組成である。土器組成の特徴の一つとして、18 ~ 26 にみる加曾利 E I 式土器が共伴する実態である。18 ~ 23 は口縁部文様帯を有すキャリパー状深鉢で、横位 S 字状意匠や弧状意匠を配す例である。地文に条線を施す例もあるが、殆どが撫糸施文である。24 ~ 26 は東関東系の土器であろうか。

丸山遺跡 7 号住でも述べたが、加曾利 E I 式土器が勝坂式と共伴する例は、既に問題提起されており、中峠式の在り方を含めて、なお今日的な課題の一つである。

本住居跡の土器組成は、本節で提示した丸山遺跡、加能里 21 住と同様に勝坂 3 式を主体とした土器組成である。丸山 2 号住の項でも述べたが、この現象の背景として、組成の主体となる勝坂 3 式の継続性が極めて強く、加曾利 E I 式土器との共伴を果たしたのであろう。

ここでは収斂進化した加曾利 E I 式土器と勝坂 3 式との組成を位置付けておきたい。群馬県における加曾利 E I 式古段階の土器組成では、変化を重ねた「勝坂系」が組成に加わるのに対し、中郷 8 号住では、勝坂 3 式が組成の中心に座り、独自の文様構成を保ち、加曾利 E I 式との共存を果たしているものと判断したい。

このように、南関東の勝坂 3 式の様相として、埼玉県

狭山市丸山遺跡出土土器と飯能市加能里遺跡、中郷遺跡出土土器を選らんで雑駁な分析を加えた（註 10）。報告者の方々が設定した時期と若干ながら差が生じてしまったが、今後の課題として、検討を加えたい。土器組成からは、やはり勝坂 3 式の優勢な地域では、勝坂 3 式主体の土器組成となり、加曾利 E I 式古段階においても勝坂 3 式が優位を占めるようだ。丸山遺跡や加能里遺跡のように、一つの型式・類型が組成の中心として量を誇る組成様相と群馬県のように複数の類型が群在し、中核となる土器が希薄な組成を示す様相は、地域差以上に該期類型群の役割の差が存在するようだ。このことは、機会をあらためて取り組みたい所存である。

3. 伝統的「勝坂系」の在り方

前節では長々と、県内と埼玉県の該期土器組成を概観し、勝坂 3 式や「勝坂系」が勝坂 3 式終末段階から加曾利 E I 式古段階の土器群と共に伴する実態を見た。群馬県の場合、体部区画文あるいは横帯文区画する「勝坂系」が、収斂進化した口縁部区画・体部懸垂文構成の加曾利 E I 式と共に伴する様相は、文様構成上でも異系統の共伴である。勝坂式は「勝坂系」への変化の過程で、収斂的な中峠式や周辺の土器群との相互影響で、体部文様を簡素化したり、口縁部文様帯を省略し、体部文様を上昇させる文様構成手法を採用する例は前稿で指摘した。また、「勝坂系」と「焼町類型」・「三原田類型」との共伴は各類型が時間の経過と共に、盛期から消長化しつつも伝統的土器群として、次代の土器組成に居座る様相も既に述べた経緯がある（山口 2001）。

本節では、この伝統的土器群としての「勝坂系」を考えてみたい。加曾利 E I 式古段階では、「勝坂系」は様々な型式・類型群と共に伴する。前節で述べた県内の共伴様相を大枠で雑駁にまとめると、

勝坂 3 式終末段階：「勝坂 3 式」・「焼町類型」・「中峠式」・「三原田類型」が共伴する。勝坂 3 式が安定している段階と考えるが、組成の中には「勝坂系」として判断した個体が入る。大枠で捉えているため、一部加曾利 E I 式成立期の土器群も加えて考えている。旭久保 C 6 号坑、下遠原 A 区 JP 8 壤、三和工業団地 J 76 号住を充てる。加曾利 E I 式古段階：「退化した焼町類型」・「三原田類型」・「勝坂系」・「阿玉台 IV 式」・「中峠式」あるいは「加曾利 E I 式」の共伴。勝坂 3 式の変化形態として、樽状深鉢などの「勝坂系」が組成に加わる段階である。瀬戸ヶ原 J 2 住、道訓前 23 住、上ノ平 18 住、上ノ平 31 住、三和工業団地 II 13 住、加法師 2 号住があたる。

加曾利 E I 式新段階：厳密には新段階とするより、中段階とするべき土器群が占める。組成によっては頸部無文帯を有する土器も加わるため、新段階としている。組成としては、「退化した三原田類型」・「変化した勝坂系

」・「中峠式」・「加曾利E I式」の共伴が見られる。三和工業団地II 18住・J 1560坑があたろう。

土器組成の様相を包括して判断した段階であり、個々の土器への段階設定ではなく、あくまでも便宜的な段階としてご理解願いたい。

このように、「勝坂系」は中期後葉初頭段階を中心に、継続的に組成の中に入る一群なのである。無論本稿では「勝坂系」を優先して掲載しているため、このような組成提示となってはいるが、「勝坂系」が継続的に組成に加わる様相は把握できる。ただ、群馬県内の組成比率としては、勝坂3式段階から勝坂式は既に少数派であり、埼玉県丸山遺跡や加能里遺跡で扱ったような圧倒的な勝坂3式の出土量を見ない。群馬県では各期を通じて1～2個体が組成に加わるのみである。確かに他の類型群も主体とはなり得ないのであるが、「焼町類型」や「三原田類型」が大型突起や袋状突起を付し、隆線を立体的に加飾するに対し、「勝坂系」は区画文と中小型の突起を主とした装飾で、小型の「勝坂系」土器などは客体的印象を得る。にもかかわらず、「勝坂系」は意外に長命な継続的組成を見せる。前にも述べたように、その背景には、体部文様を簡素化したり、口縁部文様帯を省略し、体部文様を上昇させることによって、加曾利E I式的な文様構成手法を受容したため、周辺類型群との整合が果たされたためと考える。さらに、その文様構成が土器制作上区画文主体であり、比較的に習熟・伝承しやすい構成方法であるため、次代への認知・伝承もスムーズに行われたものと想起される。つまり「勝坂系」は、文様帯設定位置を上昇させることにより体部を簡素化させ、かつ文様構成を区画文の踏襲としたため比較的単純な文様構成であり、長期間の製作伝承が可能となったのではないか。文様構成を単純化するという手法は加曾利E I式文様構成の指向であり、そのため組成する土器群内にあって、常に継続的な立場を得ていたものと思われる。

この単純な文様構成を保持し、勝坂3式を主体的に出土する埼玉県西部や南部では、勝坂3式が文様構成を保持しつつ勝坂3式主体の土器組成を継続し、段階毎に中峠式や加曾利E I式が加わる。群馬県での伴出例が少ない櫛形文や多喜窪タイプも伴う組成である。勝坂3式主導の組成が構築されており、収斂化を進める中峠式や加曾利E I式がやや劣勢に見える組成は興味深い。

一方、群馬県では勝坂式→「勝坂系」が客体的存在の土器環境にあって、「焼町類型」・「三原田類型」・中峠式・加曾利E I式が加わる。加曾利E I式の収斂化する過程において、南関東と群馬県では、加曾利E式的文様構成を受容する土器環境の差が存在するはずである。にもかかわらず、両地域ともいずれ加曾利E I式土器が主体となる地域である。この背景には、加曾利E I式古段階から共伴を続け、加曾利E I式新段階には伝統的土器群と

化する中峠式が大きく関与しているものと想定したい。中峠式は発生当初から、既に口縁部文様強調、体部懸垂文という収斂進化文様構成を保持し、加曾利E I式主体となる土器組成の基盤的存在を示すものである。この点については、栃木県域の中峠式や今回提示した加法師遺跡の土器様相を加味して再考する必要があろう。ともあれ、中峠式に関しては型式設定当初の考え方の一つである、勝坂・阿玉台式と加曾利E I式を繋ぐ土器群であることには間違いないのである。組成の中で共伴しつつも、加曾利E I式文様構成を成立させていった土器群である。型式とは、個々の土器の不連続性ではなく、連続性の上で成り立つものではないかと考える。

ともあれ、「勝坂系」が継続し、衰退していく過程に、「焼町類型」や「三原田類型」、さらに中峠式や大木8a式あるいは8b式、阿玉台III・IV式が組成に加わる。その間、「勝坂系」は体部区画文構成あるいは単位文構成という伝統的文様構成方法を保持し続けるのである。区画文は、文様帶の移動や省略という手法が容易であるため、中峠式や加曾利E I式に見られる文様構成の一部を受容できる特性を持つ。区画文構成は、他の「焼町類型」や「三原田類型」には無い文様構成方法で、そのため、「勝坂系」は伝統的な土器文様を継続しつつも、収斂的土器群内の組成において、自らの立場を保つ事が可能だったのであろう。

伝統的な土器群とは、伝統的な土器文様を単純化するため、次代へと継続する土器群である。言い換えれば、単純な土器文様構成の土器が、次代へ顕著に残存する傾向を把握しなければならないだろう。「勝坂系」は一見複雑な文様構成に見えるが、体部一帯の区画文構成を主とするため、文様施文上次代へ認識しやすく、「パネル装飾」単位の継続を果たし得たのであろう。それ故、伝統的勝坂3式文様が、加曾利E I式古段階や加曾利E I式新段階にまで継続するものと考えている。

まとめ

本稿では「覚書」程度に、前稿の「勝坂系」提唱後的新資料を使って、再検討を試みた。群馬県内の中期中葉末から後葉初頭にかけての土器組成を中心とした様相を提示した。従来、赤城山西南麓周辺や西毛地域を中心とした資料が中心であったが、今回は吾妻川流域と県東部の資料を新たに加えることができた。「勝坂系」を中心とした組成を集めたが、各地域で、若干ながら土器組成の差を見いだす事ができた。

資料の集まる赤城山西南麓域では、「勝坂系」・「焼町類型」・「三原田類型」・中峠式による組成が知られてきた。今回はそれに、吾妻川流域では勝坂系の若干の優位性と曲隆線波状縁深鉢や大木8a式新の組成を見ることができた。一方の、県東部地域では、「焼町類型」や「三原

田類型」の分布を確認できたとともに、客体的な「勝坂系」と中峠式の優位性が把握できた。

群馬県のこの時期の土器組成は、個々の土器群が際立つ存在を示す中、若干ながら地域性を反映した組成の偏りが存在するようだ。しかしながら、勝坂式・「勝坂系」を見ると、勝坂3式終末段階から加曾利E I式新段階に至るまで、継続しつつも客体的な存在を示すようだ。

このような、群馬県の該期土器組成を踏まえて、勝坂式の主要分布圏の一つである、埼玉県南部や西部の土器群を概観させていただいた。その結果、勝坂式は勝坂式として加曾利E I式古段階へ継続する様相を見た。

丸山遺跡や加能里遺跡、中郷遺跡で見た、勝坂3式土器が加曾利E I式と共に共伴する現象は、既に、南関東の資料群で指摘されて久しい。新しい要素が古い要素と伴つて共伴する現象は通常であり、また古い段階の土器組成に新しい段階の個体が加わる例もまた通常であろう。系統的な型式の漸次性として各時期、各段階に観測される現象であることは冒頭でも述べた。現在、我々が見る土器組成は、単純な型式区分による段階設定が大変難しい一群が多く、系統的な型式を重視しつつも、編年論を構築しなければならない問題点を持つ。加えて群馬県のような、異系統土器群の共伴が顕著な地域では主体となる土器群を抽出するのは難しく、多数の類型群が独自性を保ちつつ共伴する実態が、この段階の土器様相と見ることができよう。この共伴の実態を土器組成という単位で分析を続け、群馬県内の「勝坂系」とした一群も再考し、勝坂3式終末段階や加曾利E I式古段階に伴う実態をさらに明確にすべきであろう。

次に、「勝坂系」の継続性の要因についても考えを巡らせた。既に、前稿や過去の分析で提示した考えを再提示した格好だが、勝坂3式の持つ文様構成自体が、「勝坂系」を継続させた要因と位置付けた。体部区画文構成は、様々な文様構成や文様要素を受容できる構成であり、「パネル装飾」技法の特性と位置付けられよう。加曾利E I式古段階以降、「勝坂系」は伝統的土器群として、長く他の類型群との共存を果たしてきたのは「勝坂系」の文様構成による他の系統との調整であり、それ故、異系統土器群内での認知が定着していたものと考える。一方、「焼町類型」や「三原田類型」は、あまりにも装飾手法が昇華したため、土器文様を継続できず、「勝坂系」よりはるかに短命に終わつたのであろう。その中で、中峠式は加曾利E I式の文様構成をそのまま重ね、加曾利E I式内部に包括されていったものと考えられる。

換言すれば、勝坂式という土器群の消長を考えた場合、埼玉県で見た勝坂式主体の組成継続様相は、各個体の変化が少量なのに対し、組成主体の土器を持たない群馬県では、例えば勝坂式は「勝坂系」へ変化を重ねるように、変化への振幅が大きく観測されるのではないだろうか。

最後に「勝坂系」の名称について、考えておきたい。確かに「勝坂系」という名称は土器の系統性を表すのか、単位を表すのか不明瞭な名称である。筆者自身は前稿では系統性を意識した位置付けであったが、勝坂式が類型群の複合である型式実態を踏まえると、「勝坂系」の系統的単位としての位置付けも可能である。

ただ、「勝坂系」を勝坂式からの型式理解とするか、加曾利E I式からの理解が有効なのか、筆者自身極めて判断に苦しむ。勝坂式の系譜を尊重した場合は、「勝坂4式」あるいは下総編年の「勝坂V式」という名称が相応しい。一方、加曾利E I式を重視した場合は、加曾利E I式古段階の「勝坂系」ということになる。筆者自身前稿では、後者の考え方を持って、群馬県内の中期中葉末を分析してきた。これは、共伴する「焼町類型」や「三原田類型」、中峠式に対する理解を前提に、極めて個性的な一群の共伴とその後の加曾利E I式を望んだ場合、群馬県内の共伴実態から、加曾利E I式古段階を若干遡らせて、既に齊一化が浸透しはじめた組成を位置付ける例が有効と考えたからである。しかしながら、一方で今回扱ったように、埼玉県の該期土器組成群は、勝坂3式主体であり、まさに勝坂3式と中峠式や「三原田類型」との共伴実態を見る事ができた。これら新しい要素だけを拾って、加曾利E I式古段階とは言えず、特に丸山遺跡2号住や7号住、加能里21号住出土土器は、勝坂3式段階と判断でき、ここでみた勝坂式の一群は「勝坂系」とは位置付けられない。この実態を踏まえて、群馬県内で「勝坂系」に相当する土器群を捉え返すべきである（註11）。

また、勝坂式は類型の複合体である。どのような類型の組合せが勝坂式・「勝坂系」を構成しているのかは、これから検討課題である。「勝坂系」はいわば過渡期の継続的な土器群への仮称である。本稿で、徒な名称を提示すると、地域間の型式の摺り合わせに陥る危険性もある。やはり、各地域の土器組成を相互に比較分析し、併行する型式群や類型群を確定する作業を優先すべきであろう。その上で、特徴的な土器群に対し型式名や類型名を充てるべきである。例えば、本稿1図で提示した樽状深鉢の一群は、何等かの類型名が必要なのかもしれない。さらに付け加えれば、丸山・加能里遺跡でみた、筒形土器の一群にも何等かの名称が必要であろう。上記のような条件整備を果たし、勝坂3式・「勝坂系」内部の諸類型を捉え返し、勝坂式と「勝坂系」を区分する作業が用意されるべきであろう。本稿は、「勝坂系」土器の再検討を目論んだが、さらに再々検討が必要である。多くの方のご助言を得て、再々度取り組みたい所存である。

稿末で恐縮であるが、本稿をなすにあたり、下記の方々にお世話になった。特に事業団縛文班の皆様には、常日

頃、筆者の考えをいやな顔ひとつせず聞いて頂いて感謝している。記して感謝したい。

飯島義雄 江原 英 小川卓也 小野和之 掛川智子
加藤美津子 下田真弓 島崎敏子 鈴木徳雄 高橋初美
田中富美子 日沖剛史 福田貫之 藤井文江 古谷 渉
細井美栄子 宮内慶介 向出博之 吉田有光

註

- 1) 山口逸弘 2000 「「勝坂系」という末裔たち－勝坂式以降における文様構成の伝統と収斂化－」『群馬考古学手帳10』P15-P30 群馬土器観会
- 2) 小林謙一 2004 「長野県から群馬県にかけての地域の縄紋中期中葉土器の編年研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 P19-P35 国立歴史民俗博物館
- 3) 堤 隆 他 1997 『川原田遺跡』長野県御代田町教委
長谷川福次 2001 『道訓前遺跡』北橋村教委
- 4) 該期の体部縄文施文の一群は「勝坂系」や中峠式・「三原田類型」などに顕著である。また、加曾利E I式成立期及び加曾利E I式古段階においては、型式的な区分が困難な個体が多い。大木8a式・8b式などとの関係も重視して、分類を重ねなければならない一群である。
- 5) 「道訓前類型」とされる一群が近似する。口縁部や体部上半に特徴ある類型のため限定できないが、体部文様の在り方は類似する。
- 6) 阿玉台IV式と判断したが、かなり変容した例である。
- 7) 石塚和則 2003 「V 考察」『丸山遺跡』埼玉県狭山市遺跡調査会
- 8) 埼玉県ではこの他に、口縁部に格子目の隆線文を施す一群があり、それらとの関係性も念頭におきたい。
- 9) 大沢鷹廻・芝崎孝 1962 「東京都・中村橋遺跡の中期縄文土器」『考古学手帳』14
- 10) 三上嘉徳 1965 「埼玉県吹上貝塚の中期縄文土器－報告書記載の土器再考－」『考古学手帳』25
- 11) 金子直行 2001 「2 加曾利E I式成立期に置ける土器群の再検討」『まま上遺跡』P151-P166
- 12) 金子直行 2001 「2 加曾利E I式成立期に置ける土器群の再検討」『まま上遺跡』P151-P166
- 13) 当段階の勝坂式を考えるに、先史土器図譜における山内氏の提示された勝坂式土器に対する判断を余儀なくされよう。図譜にも載る、勝坂遺跡を標識資料とする勝坂式土器ではあるが、山内氏による勝坂式の提示された土器群は、今日的には加曾利E I式古段階に共伴する可能性を保有する土器群である。ただあくまでも、図譜にのる勝坂式は編年型式として確定しており、勝坂式としての編年枠を重視しなければならない。将来的に勝坂式編年を再構築する研究が試みられた際には、加曾利E I式に共伴する「勝坂4式」という位置付けも有効と思われる。

参考文献

- 赤山容造 1990 『三原田遺跡』第2巻 群馬県企業局
新井 仁他 1997 『南蛇井増光寺遺跡VII』 群埋文
石塚和則 2003 『丸山遺跡』埼玉県狭山市遺跡調査会
大賀 健他 1997 『新堀東源ヶ原遺跡』松井田町遺跡調査会
大塚昌彦他 1987 『行幸田山遺跡』渋川市教委
大村 裕他 1985 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8号 下総考古学研究会
岡屋紀子 1999 『加法師遺跡』館林市教委
木村 收 1994 『白倉下原。天引向原遺跡』 群埋文
小林謙一 2004 「東信・北関東地方の縄紋中期中葉土器の生産と流通についての予察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博物館
佐藤達夫 1974 「土器型式の実態－五領ヶ台式と勝坂式の間－」『日本考古学の現状と課題』 吉川弘文館
瀧川仲男 2008 『上ノ平I遺跡』群埋文
竹内 寛 1999 『瀬戸ヶ原遺跡(A区)』大間々町教委
谷井 彰 1992 「富士見市鶴瀬出土の勝坂系土器について－円筒系土器に見られる縦位区画文の検討－」『研究紀要』14 埼玉県歴史資料館
長谷川福次 1997 『六反田遺跡II』北橋村教委
長谷川福次 1999 「道訓前遺跡II 遺構・遺物」『北橋村村内遺跡VII』北橋村教委
土肥孝・長谷川福次 2004 「道訓前遺跡の縄文式土器－縄文時代中期中葉から後半初頭に至る赤城山西～南西麓の土器様相－」『先史考古学研究』第9号
富元久美子 1998 『飯能の遺跡25 加能里遺跡第16・20・21次調査』飯能市教委
長谷川福次 2001 『道訓前遺跡』北橋村教委
羽鳥政彦 1987 「向吹張・岩之下・田中・寄居遺跡」富士見村教委
福島正史・山際哲章 2004 『三和工業団地II遺跡』伊勢崎市教委
福田貫之・山口逸弘 2009 「富士見村旭久保C遺跡6号土坑出土土器について－共伴資料の検討－」『考古学の窓2』國學院大學卒業生・発掘者談話会有志in群馬
藤阪和延 1992 『中川原遺跡群発掘調査報告書II小林・山神・大畑遺跡』大胡町教委
松島榮治・福田貫之・山口逸弘 2005 「嬬恋村今井東平遺跡の紹介－区縄文時代中期土器資料を主に－」『研究紀要』20 群埋文
松村和男他 1999 『沼南遺跡』群埋文
柳戸信吾 1998 『飯能の遺跡26 中郷遺跡第1～3次調査』
山口逸弘 2004 「群馬県における「焼町類型」の位置－異系統土器共存の一観角－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博物館